

2011 年度 第 27 回

在日アジア人留学生への研究補助

受給生紹介



東京・三田の慶應義塾大学にて

RASAーアジアの農村と連帯する会  
Rural Asia Solidarity Association

氏名 **Khandakar Md. Habib Al Razi**  
(カンダカル・エムディ・ハビブ・アル・ラジ)  
出身 **バングラデシュ**  
大学 **岐阜大学**  
**工学研究科 博士後期2年**



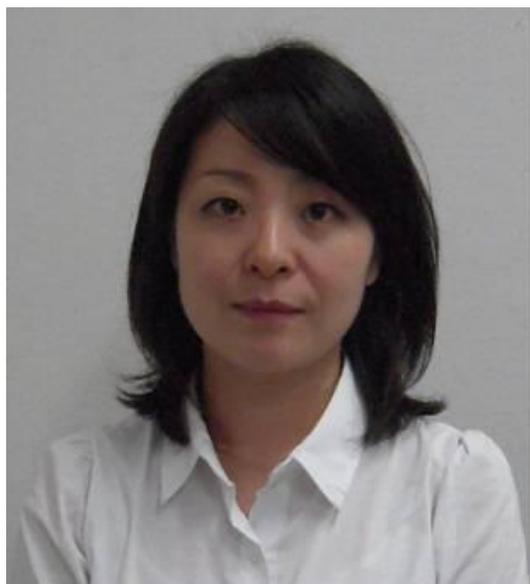
(留学目的)

大学生の時、日本の大学院で勉強していた従弟に日本のことをたくさん教えてもらい、日本の文化と伝統に興味もあったので、日本は私のビジョンにおいて夢の国になった。私は、より高度な専門性に精通した技術者になるために日本に来た。革新的な技術力を誇る日本は、高度な教育を受けられるだけでなく研究に取り組むための素晴らしい環境が整っている。私が所属する岐阜大学の環境エネルギーシステム専攻は、優秀な環境技術の専門家が数多く所属しており、多くの刺激を得ることの出来る素晴らしい環境である。このような優れた環境で、イノベーションを起こすために岐阜大学に留学した。

(研究課題)

水銀、カドミウム、鉛などの有害微量物質については、国連環境計画(UNEP)が各国の排出量調査を求めており、「地球環境汚染物質」として位置づけられている。現在の研究では、排出元となる煙突から排出される有害微量物質に着目し、米国 EPA の開発した化学物質輸送モデル CTM に微量物質の反応、沈着過程を組み込み、排出元近隣への微量物質沈着量を推計するモデルを開発するとともに、局地気象モデル WRF を用いて近隣諸国の影響についても検討することを考えている。有害微量重金属の大気拡散過程は現在の化学物質輸送モデル CMT では評価できず、さらにこれらの大気中での化学反応過程などにも不明な点が多い。博士課程ではこの有害微量重金属を数値シミュレーションで再現できるようにする。

氏名 黄 英遠  
(ファン ヨンウォン)  
出身 韓国  
大学 日本女子大学  
人間社会研究科 博士2年



(留学目的)

大学で運営する総合社会福祉館(Community welfare center)の在宅センター、地域福祉センターで仕事をしながら老人、障害者などの多様な社会的弱者の心理的、医療的、経済的問題に接するうちにその人々が抱えている生活の困難さについて分かるようになってきた。特にビニールハウス、チョッパン(未認可宿泊所)のように劣悪な居住環境で生活している人々の困難さについても分かるようになってきて、この問題に関して勉強したくなかった。しかし、居住貧困層に対する研究はまだごくわずかしかな行われていなかった。特に、野宿と安定的な居住環境の間で重要な役割をしているチョッパンと係わった研究は大部分が実態分析中心に留まっている。そして、社会的排除に対する研究は理論レベルの研究がほとんどであり、社会的排除の観点で貧困層に対する研究も不足であったため、韓国よりそれらに関して研究が進められている日本での留学を決めた。

(研究課題)

#### 社会的排除の観点から見た都市貧困地域のメカニズムに関する研究

社会的排除の指標を基準に、チョッパンの形成過程、背景、地域の属性等を分析するとともに、これへの公的政策や民間の活動についても分析する予定である。その目的は、以下の3点である。第一に、韓国のチョッパンの形成過程及び背景の分析を通じて、都市貧困地域の本質を明らかにすること。第二に、社会的排除の視点から社会的不利地域の特性を把握すること。第三に、地域福祉の観点から社会的不利地域対策に示唆を与えることである。特に、地域の再生に関する問題は新たな課題でもあり、地域福祉的な観点で「地域再生」の方法について探る予定である。

氏名 Nayanbaatar Amarjargal  
(ナヤンバートル アマルジャルガル)  
出身 モンゴル  
大学 埼玉大学  
文化科学研究科  
博士4年



(留学目的)

モンゴルの大学で日本語を専攻し、5年間日本語の通訳として働いた。当時の勤務先である「ウランバートル市道路網改善プロジェクト」では、増加する自動車利用の需要に対して、道路を建設することで問題を解決するという姿勢が強かった。しかし、増加する車需要を満たすだけでは不十分だと考え、公共交通機関が整備され、人々の交通意識も高い日本において、都市交通について研究を行い、ウランバートル市の問題解決に役立ちたいと思ったのが、留学の目的である。

(研究課題)

本研究では、モンゴルのウランバートル市において都市交通の課題を改善するために、自転車の利用を促進するものであり、その中で住民の自転車に対する意識を改善することを重要と考えている。旧社会主義国として社会基盤を持ち、現在は開発途上国でもあるモンゴルのウランバートル市において、自動車の過度利用や不十分な公共交通サービスなどいくつかの都市交通問題が生じており、その一つの解決策とし、環境や社会に負荷が少ない、健康的な乗り物とされる自転車の利用促進を提案している。

氏名 金 東妍  
(キム ドンヨン)  
出身 韓国  
大学 東京大学  
総合文化研究科 博士1年



(留学目的)

私が日本に留学した目的はもっと正確に知りたい、そして役に立ちたいという二つの言葉で表現できると思います。その文学を実際に生み出した本国に行ってその国の歴史と情緒を理解したい、専門の先生のもとでさらに研究を深めたい、そして現地の学生と肩を並べて仲間意識を育てたい、そしてともに未来に向けて正しく力強く進んでいきたいと思ったからです。卒業には日本文学の専門家として日韓関係の新しい地平を開いていくために役に立ちたいと思っています。日本と韓国は近いながら遠い国だという認識があります。また、政治と民間レベルでの断層は仕方がないという理解もあります。ところが私はその距離を縮めることが他ならぬ学者達の役割であると思っています。私の研究が学問の領域に閉ざされたものではなく、日韓の友好に小さな力でありながらも役に立ちたいと思い留学することになりました。

(研究課題)

修士論文では《戦争詩》とよばれ、現在の詩の研究からタブー視されている用語が実際何を意味していたのか究明しました。「戦争詩」とは元来兵士による詩作品を意味します。ところが、戦後の詩壇は自分たちの戦時中の詩業を隠すために戦争に関する詩をすべて《戦争詩》という用語で包括し葬りました。実際の戦時中の詩の現場では兵士による「戦争詩」と戦後の詩壇で書かれたものは違うものとして区別していました。戦後、戦争協力詩として批判されているのは実は「戦争詩」ではなかったのです。兵士の生の経験から生まれた切実な声は戦後まともに論じられる機会を失っていました。それで私は論文で本当の意味での「戦争詩」を分析しました。博論ではテキスト分析をさらに深めたいと思っています。それはテキストの外側のみ視線は二項対立などという皮相的な結論になりやすいためです。テキストの内側に耳を傾けることによって今までとは違う意味が発見できると思います。

氏名 武 玉江  
(Wu Yujiang)  
出身 中国  
大学 立教大学  
法学研究科 博士後期3年



(留学目的)

急激な経済開発と発展が行われる一方で、国家による社会の全面的な抑圧から解放されつつある中国社会は、21世紀に入り、社会の多層化・多元化が進み、多様な社会運動が次々現れている。ただ、政治的な側面を見ると、政府は公的資源をほぼ独占しており、言論自由や結社自由を厳しく制限するため、中国の政治体制と同じように、中国の社会運動も一種の「特殊性」を有する。

近年中国の都市部においては、都市開発や都市計画をめぐり、都市住民と行政または事業者の間に、トラブルや紛争などが多発している。その数は2005年にはすでに年間5万件以上発生している。その中には、都市部の住民を主体とする社会運動が中国の都市社会に登場したのは近年のことである。住民らが、ローカルレベルの特定の社会問題をめぐり、自発的に組織し、問題解決を目指して運動している。運動イシューの多くは、環境問題やまちづくりに関わる問題——地域の道路建設やゴミ処理施設の建設、産業施設の建設等である。

(研究課題)

今日の中国において生じている様々な社会運動を分析することにより、今日の中国研究に大きな関心が抱える諸問題——環境問題や市民の政治参加の問題、市民結社と市民社会の形成の問題など——の実態とその構造的な意味を考える上で、新たな視点を提供しようと考えている。ローカルの問題をめぐり、人々が自らの利益や権利を主張して組織をつくり、企業や政府に異議申し立てしている。中国ではそのような行動を「維権」という。元来その言葉には「利益や権利が侵害される」という消極的なイメージがあるが、実際の運動にはより積極的な方向への展開が観察される。つまり、国家・行政に対する抵抗や対立の側面とともに、行政との協働・ローカルな政治への参加という側面もある。その意味で、現代中国の権威主義的な体制の下でも、都市住民による社会運動は一つの政治参加の形だと言えるのではないか。そこには、都市部の人々が自発的かつ実践的に政治に参加し、新たな公共性及び公共空間を開いていく可能性が見て取れる。

氏名 江 文博  
(Chiang Wen-Po)  
出身 台湾  
大学 慶應義塾大学  
政策・メディア研究科  
博士1年



(留学目的)

近年エネルギー・環境問題への関心が高まっているので、現行の内燃機関自動車の代わりモータを駆動源とする電気自動車(EV)に注目が集まっています。台湾企業でブレーキの設計を担当していた私は EV におけるモータの回生ブレーキと油圧ブレーキの協調制御に関する研究願望は常日頃から持っています。そして、ある機会、日本の慶應義塾大学の EV 研究室は該当分野で世界的水準に達していることを知り、留学することを決意しました。EV には一番重要なのは一回充電の走行距離と言われていています。今の研究テーマの成果を出すことができれば、ブレーキから消耗した運動エネルギーを電気エネルギーに変換し、バッテリーに充電できるため、より安全的に長い距離が走れる EV の製作に貢献できると考えています。

(研究課題)

研究テーマは油圧ブレーキを搭載した電気自動車(EV)の回生ブレーキを最適化する協調制御です。油圧ブレーキはブレーキパットを介して制動力として出力されますが、ブレーキパットの伝達関数は摩耗具合や温度などにより変化するため、制動力は正確的にわからなくなってしまうし、応答も数 10ms 程度と電気モータに比べて遅いです。そこで、本研究では EV において油圧ブレーキの制動力の測定とその制御の困難を解決し、安全性に影響するスリップの考慮に基づき車両安定性を維持した状態で回生ブレーキの効率とブレーキの性能を最適化することを目的とします。

氏名 Wariki Windy Mariane Virenia  
(ワリキ・ウィンディ・マリアネ・  
ヴィレニア)  
出身 インドネシア  
大学 東京大学 医学系研究科  
博士3年



(留学目的)

I came to Japan in 2003 with my family as a dependent to my husband, when he did master course because we would like to stay together. On that time, I found that in The University of Tokyo there was a study program that can emphasize student-directed learning, teach the problem-solving, and the acquisition of fundamental public health skills, such as health policy and social sciences. Moreover, this program was designed to train the next generation of leaders in global health particularly in developing countries. It was very closely similar with my mission when I did my work in Indonesia, and I really believe I can improve my ability and knowledge by study here. I started my master in The University of Tokyo in 2007. In March 2009, I completed my master course as a Master of Health Science. And in April 2009 I continued my study for PhD at the same department.

(研究課題)

I am interested on economic evaluation of HIV intervention for preventing the transmission of HIV infection. Currently, the Indonesian National AIDS Commission and the UNAIDS-sponsored Commission on AIDS in Asia point to a crucial role of sex workers in determining the future of the epidemic in Indonesia and the region as well. However, there is lack of information reported the efficacy of behavioral intervention to reduce incidence of HIV and sexually transmitted disease, and cost-effectiveness of that intervention as well. Therefore, I am doing a research entitled "Behavioral intervention for preventing the transmission of HIV infection among sex workers in Indonesia: Cost-effectiveness analysis". This study will assess the cost-effectiveness of social cognitive intervention additional to promotion of condom use in reducing transmission of HIV/STI incidence among sex workers in Indonesia.

氏名 哈斯朝魯  
 (はすちよろ)  
出身 中国・内モンゴル  
大学 東京学芸大学  
 美術・書道講座 研究生



(留学目的)

日本は油絵の技法研究が進んでいる国で、先進国で新たな雰囲気の中でいろんな新しい材料と技法を試す事ができ、観念的にも新たな発想が生じればと考え来日した。美術の面だけではなく、内モンゴルでは知る事のできない数多くの情報を知る事ができ、今まで勉強し正しいだと思って来た自分民族の歴史を含めいろんなものを新しい立場から見直すことができた。故郷を外から見ることで、内モンゴルにいる時には、はっきり知らなかった(あるいは知る事できなかつた) いろんな事実が分かるようになり、作品は主に故郷の人物をテーマにした。人間を描く事により故郷の人々の心及び悲しい現状を表現したいと思うようになった。

(研究課題)

「油絵による表現技法の研究」をテーマに、今まで自分が最も手かけているもので、内モンゴルの伝統及び現状に基づいたモチーフを強調して行こうと思います。そのため現代の新しい絵画表現との融合に着眼点を置いて、故郷の人物などを題材にし、それに新しい技法等を研究し作品に取り入れて新しい表現の発展を目標に研究していきたい。

いろんな素材と技法を調べ、比較し、絵画表現の可能性を探ることを目的に研究を行っていきたいと思う。